

ふだん着のヨーロッパ史

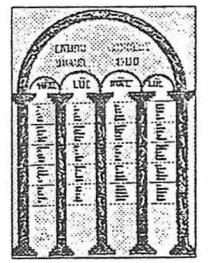
生活・民俗・社会
井上泰男



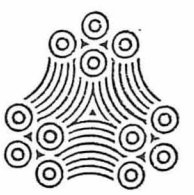
めまぐるしく移りゆく歴史の流れのなかで、人びとの暮らしの歩みと変化は緩慢であった。日常生活と民俗に焦点をあてた新しいヨーロッパ史。

●定価2,300円

「ヴァールブルク・コレクション」
ゴシック建築とスコリア学
E.パノフスキー／訳 前川道郎
大まかとしての建築、あるいは建築としての大全。スコリア的言説とゴシック建築の構造に通底する中世精神の深奥に迫った名著。新シリーズ第一弾。
●定価2,000円



平凡社 千102 東京都千代田区三番町5
振替・東京8-29639
TEL 03-265-0455



『思想の危険について』 ——吉本隆明のたどった軌跡—— 田川 健三

インパクト出版会
二八〇〇円
〈評者〉橋爪 大三郎



吉本隆明に関する著書は数多いが、期待外れが目立つた。最近はいちいち読んでいない。この書はどうであろうか。

著者、田川健三氏は、キリスト教の研究者としてつとに名を知られ、吉本氏とも幾度か交流があった由である。題名から伺えるように、これは思想家吉本に対する諷言の書とみられる。当然、読者の興味は、吉本が陥ったという「危険」を、著者がどう扱うか。

一九六〇年頃の吉本を、著者は高く評価し、それがその後だんだん良からぬ方向に変わってきた、とみる。いわば、吉本「変節」論である。そこで転換点(こけたきつかけ)を探られるわけだが、それが『最後の親鸞』と『共同幻想論』だという。この二書は、吉本「変節」論である。そこで転換点(こけたきつかけ)を探られるわけだが、それが『最後の親鸞』と『共同幻想論』だという。この二書の検討が、大部な本書の前半、後半を占め、間に「反核

りだし、そこに納得できる説明を与えてくれたかにも集まるだろう。

著者田川氏には少々失礼かもしれないが、ごく大づかみに論点を整理させてもらおう。著者はいう。吉本の親鸞論がまずいのは、吉本が宗教者としての親鸞の実像にもと

づかないで、勝手に自分の思想的地位(自分が知識人として大衆から離反してしまっている)、なんとか大衆になりきりたい)を投影しているにすぎない点である。また共同幻想論がまずいのは、彼の理論と素材がちぐはぐで論証の体裁をなしていないうえ、理論は理論で、共同性をはなから敵視して国家と同一視したり、女性蔑視まるだしの対幻想の概念を持ち出したという程度のおそまつなものではない点である。

▼▼▼
「吉本批判」の二典型では、どうしてこんなことになるのか?

著者によると、それは吉本

大槻健、今橋盛勝、津田玄児編
『教師の体罰・暴力』
学事出版
一四〇〇円

横浜市立下瀬谷中学で、昭和五八年度から六〇年度にかけて起こった教師の体罰問題は、被害者のうち一人の生徒と父母が横浜弁護士会の人権調査委員会へ申し立てたことになって、その全貌がほぼ明らかになった。この本は弁護士会の調査報告書を核に、父母、弁護士、教育学者などの文章、インタビュー、座談会が構成されている。

教師の体罰・暴力が、この国の学校教育にひそむ構造的

が初心を忘れたからである。「我々大衆」という位置から戦後派知識人を鋭く告発する当初の姿勢は傑出していたのに、だんだんと理論志向にとられ、抽象的な図式にすべてを押しこめてことたれりとする歪んだ態度に迷いこんでしまった。

ではどうすればよいのか。

著者は、初期吉本の優れた仕事のなかにも後々のよからぬ傾向が潜んでいた、と注意し、彼の一貫した一面も見落としていない。ならばそのうえで、どんな可能性が吉本に残されていたのか、本書からはなかなか読み取りにくかった。それでも、著者が思想家吉本のどこに問題を見ているかは十分伝わってくるし、それが吉本読者のよくある反応の典型になっていそうなることもわかる。



彼はただの文学者でいたいの、同時に、時代と状況に応答する体系的思想家の役回りも引き受けざるをえなかったため、忙しいのだ。体系への志向を見なければ、彼のユニークなところが台なしである。「言語にとって美とは何

か』『心的現象論』それに『ハイ・イメージ論』あたりも踏まえて、自らも変化しつつわれわれの時代を語り出す吉本の全体像を描き出すこと。変節ではなく、内在的な必然として。

これを望みたかった。著者の批判はテキストに密着しているようでいて、その実、細部にこだわりきれない。吉本の体系的な展開がみえていない(というより、著者が現代にかかわる自分自身の思想的脈絡をよく整備できていない?)からではないか。結果として、吉本のあらゆる影を撃つかたちになった。残念な点である。

個々の論点にわたるなら、吉本の浄土教理解(往相/還相)が彼独自の解釈に支えられているとの指摘、対幻想から共同幻想への展開がきわめて危うい仮説のうえに成り立っているとの指摘など、どれも正当である。たとえばこの二点に絞って批判を内在的に掘り下げたほうが、吉本にはきつかったのではなからうか。

(はしづめ だちまろう・社会学)

北村一夫
『吉原ホログラフィー』
六興出版
一七〇〇円

吉原という言葉は現在でもよく耳にするし、落語などでは欠かせないネタすじになっている。しかし、実際の輪郭は、意外に知られていない。また最近の江戸ブームという点から言っても、この吉原風俗早わかりは、タイムリーな企画である。

中身も単なる風俗情報ではなく、筆者の風流ぶりがほんのり伝わってくる。とくに「遊びの作法教えます」という章の、客と遊女のさまさまな心ばえの世界にいい味がある。それだけに最後の心中(情死)の項目があっさりしすぎて、物足りない気持ちが残る。(水)

さて、著者の批判は、どこまで急所を突いているだろうか。これは私(評者)の判断だが、本書の論法では吉本を捕まえたことにならないと思

なるほど、著者の指摘の半分近くは納得できるものであ

宗 秋月
『サランへ 愛しています』
影書房
一八〇〇円

著者の宗秋月が、「A J (朝日ジャーナル) ノンフィクション大賞」優秀作「ごく普通の在日韓国人」でいささかナイーブだが大変率直な在日論を書いた三世の姜信子に、万感こめた「批判を投

げたことは、まだ記憶に新しい。そこで宗は、在日社会の過剰な「民族」意識にわずらわしさを感じ、そこからできるだけ自由にひとりの在日として「普通に」生きたいと思う若い世代の生の感覚に対し

フックスタンド